



理事会だより (3・10)

一、桜まつり俳句大会第二部は観光協会の意向を受け  
会長決定により中止となり本日理事会で会長より経  
緯の報告を受け承認、3月号協会報に中止チラシ添  
付。投句は百七十名二百七十組と前回より減少。

二、梅まつり俳句大会の収支報告。

三、来年度役員体制は名誉会長・顧問、会長・副会長・  
専門部長・監査部は留任、新たに次長に総務部(岡  
本史郎)広報部(齊藤桂)会計部(加藤かほる)、  
大会事務局に桜(加藤かほる)秋季(米山翠)梅(木  
村幸枝、須田聡子)現大会事務局(小野菊土、田中  
幸子、田畑ヒロ子)はアドバイザーに内定、その他  
理事はこれまで通りとし総会にて決定する旨会長よ  
り報告。

四、秋の俳句大会名称を「令和4年度小田原秋季俳句  
大会」に決定。

五、定期総会議案書案を配布し次回理事会で審議。

「俳句おだわら」10句抄 (655号より)

出澤洋子 抄出

饅頭をついでに買うて年用意  
刃を入れて紅弾けたる冬林檎  
冬至はや上枝下枝に息吹くもの  
初富士の白打掛けを曳くやうに  
回診の小児病棟サンタ服

元朝や波白く嘯む烏帽子岩  
歳晩や駅なかピアノ曲速し  
秒針に遅速はあらず去年今年  
弟に姉が教へる独楽廻し  
地下鉄のA1出口初芝居

陌間みどり 抄出

年惜しむ遠くに風の鳴つてをり  
目の前に海ある暮し冬ぬくし  
福寿草どこに置いても笑つてる  
初富士の白打掛けを曳くやうに  
元朝のしじまを開く宮太鼓  
日脚伸ぶ丸くなりゆく風の角  
着ぶくれて観客席に缶コーヒー  
幸せを売ることポインセチア売る  
日面を雀発ちたる年賀かな  
潜るもぐる水鳥たちの朝餉かな

門松	鳳文	小澤	純子	池田	忠山	田中	幸子	青木	孝子	中山	智津子	大木	敬子	北崎	修	守屋	まち	片野	秋子	秋山	昇	肥後	ちさこ	寶子	山京子	田中	幸子	石井	千代子	石井	秀稀	中田	笑子	島	梅乃	古屋	徳男	岡田	典代
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	---	----	----	----	----	----	---	----	-----	----	-----	----	----	----	-----	----	----	----	----	---	----	----	----	----	----

## 令和三年度年間ベスト一句集鑑賞

(一句鑑賞のほか二句抄出)

それぞれの人生春の駅ピアノ 野川木一路

駅にはいろいろな人生が集まりすれ違う。人生という旅に疲れた人、希望をもって新しい場所へ歩み出そうとして若者、病氣や貧困に立ち向かおうと頑張っている人、気付くとそこに好きなピアノが置かれており、弾いてみる。親や先生、友達、恋人達に見守られ。聴衆はたまたま居合わせた知らない人達。束の間他人の人生に付き合っている。心の中で「いいぞ!、頑張れ!」と声援しながら。

あるがまま生きる喜び野紺菊

瀬戸とみ子

十五夜まで黙つていよう「愛してる」

穂坂志げる

隣駅見ゆる単線竹煮草

一ノ瀬茂代

真つ直ぐな線路、線路脇には竹煮草が群生しており、白い花が爽涼感を与えてくれる。隣駅が見えている。先日、滅多に乗ることのない大雄山線に乗り運転席の後に立った。前方、見事なまでの真つ直ぐな線路、踏切が鳴っていて木々が揺れていた。季節は違うが、掲句の景と重なった。滅多に見ることのない単線の景が新鮮であり掲句に共感しました。

風少し雨の少しを山桜

新井たか志

退院の父に迂回の桜道

小林 環

(伊藤はる子)

庭芽吹き初むる制服採寸日

池田 令子

一読して合格おめでとう、良かったねと声をかけた。採寸日が良い、連想が広がる。家族揃つての喜びが伝わるのは季語が良いからであろう。庭木までもが祝福している。

親であれば誰でも経験した安堵と誇らしさを十七文字にまとめた事に脱帽した。ご両親におつかれさま。そして新人生に幸あれと声援を送ります。

道たずね道連れとなる冬帽子

加藤 富江

退院の父に迂回の桜道

小林 環

(大島美恵子)

泥葱を二皮剥けば無罪なり

田畑ヒロ子

「無罪」と言い切っているところが作者の巧みな技です。あれこれ説明せずに葱の新鮮さが強烈に伝わってきます。調理するにはちよつと面倒くさい泥葱を黒の「有罪」とするなら、一皮剥いた葱の真つ白い部分を是非見てほしいと訴えています。裁判で「無罪」を勝ち取ったかのようにスカツとします。

サイダーの体内トンネル突つ走る

小林永以子

飛行機の音なき高さ小春の日

和田恵美子

(岡田典代)

夕焼や企業戦士の古団地

北崎 修

昭和三十年頃から我が国は高度成長の時代に入り、企業活動が活発化し、大勢の勤労者が必要になりました。そのために公営住宅などの団地が生まれました。それから六十年余りが経ち、建物は老朽化し、住民は老齡化していきました。

この句の季語の「夕焼」から、かつての企業戦士は歩まれた人生に誇りを持っておられることが痛切に感じられます。

草庵のどこからとなく秋のこゑ

池田 忠山

初蝶や土に研がるる鍬の先

古屋 徳男

ランドセル走つて春の風になる

若村 京子

春風の中、おしゃべりしながら、楽しそうな登下校児の様子が手に取るように見えます。走つて春の風になるの表現はお見事。友達と遊ぶ約束が出来たのでしょうか。風の子になって走つてスキップして：

「いつて来ます」「ただいまー」我が家の小学生の孫達の元気な声と重なり、光景が見える佳句です。

少年と保護司の間扇風機

杉崎 せつ

隠れ家のような図書館文化の日

須田 聡子

(加藤まり子)

あやかりたし絶好調の夏草に

村場 十五

夏草もこれほど褒められたらさぞ満足であろう。しかしその裏で作者が汗をふきふき草と格闘している姿が目につかぶ。なんと「ミスマッチ」。文句の一つも言いたいのがこればかりはどうにもならない。ほおっておくと増々有頂になる。誰でも経験おありかと。私も作者を手助けをしたいのだが？ 身の回りの草退治で手いっぱい。ごめんなさい。

盆花が田んぼの隅で迎えてる

風間 秀泰

朝顔や企業戦士の靴の音

下平 美子

道たずね道連れとなる冬帽子

加藤 富江

用事で訪れた町。地図まで描いてもらったのに、何処かで一本、道を曲がり間違えたか。戻ってみても益々わからなくなる。寒い冬の午後、人通りのない道に向こうからやってきた人。無礼を詫び道を聞くと、にこにこ案内してくれるという。連れ立ってゆく二人。並んだ冬帽子。冬帽子の温かさとはっこり温かい心。人間ていいなと思わせる句。

夏薊苳のかへる峠口

足立 和子

朴の花こころを見せぬ高さかな

山田 照子

(瀬戸りん)

俳句おだわら(3・19メ切り、到着順)

◆小田原鹿火屋(2・25)

久江報

雨上り木の芽無尽の光り立つ

足立 和子

日の太矢射し合格の通知来る

川本 育子

短冊の東風鎮もりて枝に読む

高橋 小糸

一雨に紅濃くしたり薔薇一輪

山崎 悦子

春月や父の手蹟の千字文

近藤 久江

◆たけのこ(3・8)

悦女報

押入れの奥で泣きをる古雛

三木 泰子

梅だより電話の主の国訛

徳田 公子

春淡し丹沢連峰君は今

小宮 早苗

城の樹々ほんのり紅く春を待つ

久津間百合子

新しく墓誌に亡夫の名春浅し

宮崎 悦女

◆香雨・梅ごち(2・27)

忠山報

浮かれ猫ひらりと闇へ消えにけり

肥後ちさこ

恋猫の声にたぢろぐ闇夜かな

関戸わよこ

窓際にうつり春光ほしいまま

青山 典子

磯の香の炙り出されて海苔青し

門松 鳳文

文机に日差しやはらか梅一輪

吉田 百代

バス待ちの話の尽きぬ梅見あと

吉田 康雄

恋猫の濡れて帰りぬ昨夜の雨

陌間みどり

村ぢゆうの動き出したる春の水

小澤 純子

恋猫のこゑに耳立て月うさぎ

池田 忠山

◆こよろぎ(3・10)

つとむ報

シヤキシヤキのレタスサンドの夕餉かな

板谷 雅泉

折々に机の軋む納税期

植松テル子

蟄去してコロナ恐るる余寒かな

神山つとむ

◆春野(2・20)

きよ志報

蝌蚪の紐円周率の如くして

秋山 昇

老人に配るチラシや日脚伸ぶ

伊藤はる子

どの子にもふんはり触れる花吹雪

内田知江子

蛇穴を出づ東京のど真ん中

尾崎 一夫

この身また経年劣化亀鳴けり

瀬戸 悠

春一番赤信号を奔り抜け

二見 和江

耳遠くなり縁遠くなり春近し

長谷川きよ志

◆青梅(3・9)

幸子報

花曇り宴の席に地酒かな

大塚 行人

笙の音に神主若し田打舞

湯本とし子

四姉妹八十路越えでのひなまつり

神野美代子

直会や烏帽子を脇に花の下

加藤まり子

婆の畑風とたはむる犬ふぐり

久保寺トミ子

句帳手に久女顔して花の下  
春風をいっしょに配る郵便夫

◆鷹(3・4)

突堤に釣竿並ぶ雛の日

北窓を開き天守へ常の音

ほのぼのと煉瓦窓の灯花ミモザ

和菓子屋の引き戸のベルや二月尽

紅梅や元氣サインの雨戸開く

おしまひは口の体操蝶生る

丘に見てのびる街並菜の花忌

リモートの教師の声や目借時

路地の路地入れば昭和や孕猫

起抜けの一椀の白湯初音聞く

隅々まであをき夕空種浸し

さへづりや齡米寿のねむり夫

麗かや団地の中をめぐるバス

夜上がりの椰の葉末や利休の忌

八方に笈割れけり枯木山

黙浴の太き墨書や花の宿

雛の夜の古き螺鈿の小筥かな

揺籃に覗くかひなや花ミモザ

十五報

田淵 令子

田中 幸子

青木 孝子

西賀 久實

佐宗 欣二

須田 晴美

中田 笑子

百川 秀子

山崎美知子

柏木 良花

庄司 下載

瀬戸 りん

高橋久美子

中山智津子

齊藤 桂

芹澤 常子

山口安規子

大木 敬子

大島美恵子

田下 昌人

早春やラジオに聞ける花言葉

立春の入相の鐘響きけり

橋上に谷風うくる遅桜

雛飾る諸手の指に物着星

しぶき上げ堰の流れや彼岸道

夫失くすとハガキ貰えるミモザかな

一片の落花つきたる野良着かな

ラジオから世界の天気水温む

朧夜や国名古りし世界地図

父植えし我が誕生の桃の花

戦禍のがるる民陸続と雪霏霏と

消防も町も総出や野火走る

摘草ややはらかき風頬にあり

牛角力元同僚は野武士めき

◆みなみ(2・19)

春浅し房総の地図閉じたまま

昨日より土手濃くなりし露の臺

夕山に藁火ほのぼの浅き春

江ノ電の軋み聞きつつ若布干す

露の臺母の掌童女めく

夜勤明け老母のやさしい若布汁

中根 和子

加藤 幾代

高橋 正子

守屋 まち

米山 翠

來田 新子

大沢 年子

片野 秋子

小林 環

下平 美子

杉崎 せつ

鳥海 壮六

古屋 徳男

村場 十五

かほる報

豊田 幸枝

市川めぐみ

斎藤 静

加藤 健治

飯田 愛

加藤れい子

露のとう浮世のようす見に来たる

小瀬村信子

丹沢の嶺や残雪神々し

村上 龍山

廃校の百の窓鳴る春一番

加藤 富江

春めくや並ぶ車の反射光

加藤かほる

◆沈丁(3・5)

寶子山報

身の丈が五センチ伸びて卒業す

中野 文子

襲曲る寝押のスカート卒業子

若村 京子

手擦れしたモノクロ写真卒業式

柳澤ミサ子

シエフになると下積み十年卒業す

田中 恵一

ガラケーが終つひにこわれて卒業す

河本 純子

黄色い線の内側へ春の色

瀧本 敦子

「大丈夫」言の葉強し卒業子

勝木 澄子

臍の緒の小箱光りて吾子卒園

菅野 英余

笑顔にも涙ひとすじ卒業歌

高井 幸子

記念樹の小枝はばたく卒業子

片野 節子

卒業や行く道違ちがう夢持つて

峯尾ユキエ

はかまはく娘むすめらの姿よ春を呼ぶ

河本チヨ子

颯爽と小顔が並び卒業歌

寶子山京子

◆山北(2・17)

由里子報

変わりなき我が家彩るさくら草

和田恵美子

新墨を吸い尽くす和紙春立てり

尾崎 幸子

セピア色の父の手印やさくら鍋

中山 妙子

うす紙のごとき弥生の空一枚

尾崎 竹詩

測量のピンクのテープ揚げ雲雀

石田加津子

珠泉忌へ西行重ね夜半の春

竹下由里子

◆おほる(3・9)

昌男報

成し終えて心円やか春兆す

二上 光子

薔薇の芽の解けて紅き蹴出しめく

横塚 昌平

ものの芽や風も光もなでゆきて

石井きよ子

牡丹の芽次の一手を先読みす

石井千代子

半分の記憶のまま卒業す

小野 菊土

世の中の動き見ながら地虫出づ

香川 花子

どう動く平和の二文字春寒し

風間 秀泰

木の芽立ち我がもの顔の梢かな

加藤 春江

白梅の白さに勝る香りかな

坂入清四郎

いぬふぐり心遊ばす散歩道

瀬戸とみ子

残されて人待ち顔の春大根

高橋みどり

母の傍はなれず覗く入学児

中津川晴江

苗床に一粒づつの夢を蒔く

中根登美子

春めくや身の内にある青春歌

中村 昌男

どこからか命巡りて芽吹く音

廣田 悦子

◆零(3・17)

史郎報

一陽來復三度目はモデルナ 青木たけを

プラトニック・ラブ素肌の風と朝桜 伊藤 道郎

庭桜いつも私を守ってる 井上 良子

光り合う二色の梅や天の父母 岡本 史郎

木々芽吹く活断層の上に住む 木村 和彦

問いかける異国は戦火老桜 佐藤 正子

跳べ沙羅よ澄んだ青空揚ひばり 中村 裕子

春日遅々急かすのんびり里の人 野川木一路

◆実のり(3・17) たか志報

早春の木々の目覚めの遅ましく 岩本ひさみ

啓蟄や新しくした万歩計 杉本 久子

饒舌な卒寿の友や雛あられ 木村 幸枝

グラタンの程よき焦げ日春夕べ 新井たか志

◆草むら(3・18) 重満報

初蝶やここはなんにも無き処 石井 秀稀

眉はけば暖かさ増ゆ老体に 井上 和子

山吹を抱き締められるまま寝落つ 佃 悦夫

馬鈴薯植う塹壕のような畝へ 佐々木重満

◆無所属

二十個のいびつな団子お中日 小林永以子

ほどほどの女の嫉妬春シヨール 山口 千代

葱坊主今朝も走るや遅刻の子 一ノ瀬茂代

蒼満ち五・六輪咲く河津桜 鈴木久美子

春雪やみるみる溶けるわだかまり 北村 文江

缶コーヒーあけて梅の香逃がしけり 蓑宮 わか

児のやうに履かせてもらひ輪襪 出澤 洋子

頤に日をあつめいる剪定かな 山田 照子

利休忌の茶杓の反りは言葉なり 田畑ヒロ子

柔らかく開く手のひら苗木市 穂坂志げる

虎杖水車呂律がうまく回らない 小島ノブヨシ

石跳んで川渡る女ひと春日傘 木村美千代

ひばり野や地球を廻す車椅子 須田 聡子

露のとう伸びてもうすぐ二年生 岡田 典代

晴れ晴れとがらんだうの天揚雲雀 小澤 園子

風光る学生服の一行に 岩楯惠津子

雪のウクライナ紅梅の日本曾比区 大石 雄介

鶉コサギ鶉ダイサギうくらいな 大石 和子

綿虫の浮遊心電図の波長 杉山あけみ

生きることに辟易へりおとろおぷかな 瀬戸 正洋

E V車ふいーんと過ぎる日永かな 畠 梅乃

入園の集合写真あかんべえ 大佐田俊美

菜花映ゆチュルノブイリも青い空 木村予史重

## 第十一回おおいゆめの里俳句大会

三月五日、町立そうわ会館での大会はコロナ禍の為第二部中止となりましたが、一部の兼題投句は愛好家の皆様多数の参加を得て実施出来ましたのでご報告致します。(おほむ俳句会)

兼題は「春の土」「うららか」(傍題可)で投句者一

四一名…二三七組。

### 兼題入賞作品

大井町町長賞

跡継ぎの夢を鋤込む春の土

中井町 長谷川昭放

大井町議会議長賞

春の土祖父の名もある開墾碑

茅ヶ崎 日高 朝代

大井町教育委員会教育長賞

うららかや縁側という良き処 南足柄市 豊田 幸枝

文化団体連絡協議会長賞

「畑ですー」と店に貼り紙里うらら 大井町 小野菊土

(以下十八位まで高ポイント)

春の土踏んで今日から小学生 大井町 中村 昌男

立ち上がる仔牛の一步春の土 大井町 小野 菊土

うららかや影を一つに母子牛 大井町 中村 昌男

うららかや野仏そつと欠伸する 大井町 横塚 昌平

うららかや駅で拾いし国訛り 大井町 高橋みどり

(年間ベスト一句鑑賞つづき)

### 退院の父に迂回の桜道

小林 環

親子でも面会のままならぬ昨今、入院して毎日壁とカーテンに阻まれ、辛く厳しい日々であった父に、遠まわりではあるが美事に咲き揃った桜を見てもらいたかった。そして明るい気分になって我家に帰って欲しいという、父を労る暖かい気づかいが自然とこの句になった。父をおもう心情があふれていて、読む人の心ですつと入ってくるさわやかな共感の一句です。

老鷲の一声湖の静もれり

石井千代子

病む地球の呻き声とも暮鳴けり

加藤かほる

### いつの日も別れはふいに黄落期

(田中恵一) 横塚 昌平

この一句に共感しました。主人を一月三十一日に…一か月の闘病でした。余りの早さに心が付いて行けません。掲句を読んで自分のこととして痛切に感じ入りました。どなたとの別れか分かりませんが、私と違って立ち直っておられるでしょうか。今私は子供に励まされ一步一步と、時が解決してくれるのを待っています。近所の犬を散歩に連れ出すことが、いやしになつていきます。

ふるさとの川で蜩をとったつけ

井上 良子

大花野悟空になり風になる

二上 光子

(宮崎悦女)

陽の匂い転がす水車うららけし

海老名市 大澤 秀子

うららかや犬も家族の貌をして

相模原市 檜島喜代子

農学部のおき長靴春の土

大井町 小野 菊土

うららかや胎児の動き掌に聞けば

茅ヶ崎市 西岡 青波

春の土父の残せし農事メモ

南足柄市 豊田 幸枝

字余りのような木洩れ日うららけし

中井町 長谷川昭放

乳のごとしみてゆく雨春の土

小田原市 須田 聡子

うららかやふらりと入る種苗店

秦野市 桜庭 義昭

うららかや風の私語聞く野のベンチ

小田原市 川本 育子

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆

上げ潮のきらめく水面秋の浜

三木 泰子

秋晴れの日は、空も海もよく見渡すことができる。ひとりで浜辺をゆつくり散歩していると爽快な気分になる。渚に寄せる波の音も耳に優しい。上げ潮で沖から潮が満ちてくる。

日差しを受けて、きらめく水面も寄せてくる。立ち止ってしばらく眺めている作者の幸せな気持が伝わってくる。明快な情景描写の佳句。「上げ潮」の上五が利いている。

守衛室灯る勤労感謝の日

飛行機の音なき高さ小春の日

高橋久美子  
和田恵美子  
(吉田康雄)

\*広報部よりお願い\*

郵便の土曜日配達がありませんので、締切日に届くようご留意ください。

(俳句おだわらは十九日必着)

(理事会だより続き)

六、小田原市文化連盟解散の報告(長谷川副会長)。

藤田湘子記念小田原俳句大会の受付に伊藤はる子、田中幸子、寶子山京子、村場十五の四名を派遣することに。

城苑俳句・夏の部

(合同句集第十二集54〜68頁より近藤久江抄出)

葉桜や風熟れてきしテラス席

百周年記念式典樟若葉

左でも右でもなくて立葵

滝音を詰めて水筒ほとばしる

コンビニに済ます昼飯夏期講座

ひまはりや昼食時に並ぶ列

群衆のなかの孤独や捕虫網

煩惱の一つ鎮めて青田風

毘蘭樹の幹ひりひりと夏に入る

梅雨明くるバックミラーの朝日かな

流景の門司港にありソーダ水

新しき急須おろして新茶飲む

棧橋の板の弾力青嵐

朝靄の晴れて山家や桐の花

あぢさゐの雨にふくらむひかりかな

向日葵や夕風わびしく揺れている

堀切に草刈る音の響きけり

蚊遣火や瀬音いつしか子守歌

青嵐転がってくる子らの声

雨蛙言いたきことを一つずつ

杉崎 せつ

杉本 久子

杉山あけみ

須田 聡子

須田 晴美

関根 琉子

瀬戸 正洋

瀬戸とみ子

瀬戸 悠

瀬戸 りん

芹澤 常子

高井 幸子

高橋フミ子

高橋久美子

高橋 小糸

高橋 秋月

高橋千代子

高橋 正子

高橋みどり

瀧本 敦子

噴水やふと若沖の白孔雀

子つばめやむかしパン屋の青き軒

広重の箱根湖水図夏に入る

うどん切る音の涼しき古道かな

滝落つる白巻物を解くやうに

夏帯をきしきし鳴かせ躰り口

くづれたる落人塚や著莪の花

蛩ども放火三昧みいだな

荒梅雨や高々蕎麦を啜る音

ああ楽しかったと死にたや桐の花

竹下由里子

田下 昌人

田代 孝子

田中 恵一

田中 幸子

田畑ヒロ子

田淵 令子

佃 悦夫

出澤 洋子

寺口 成美

\*

◆お詫びして訂正します◆

655号6頁作者名杉本あけみ↓杉山あけみ

656号1頁作者名岡村史郎↓岡本史郎

8頁木村幸枝句上五「瀬朝の」↓「頼朝の」

9頁山口千代句中七「名刺いらすやす」↓

「名刺いらすや」

理事会日程 4/14、5/12、6/9

第69回定期総会 4/21

いずれも木曜日6時より、於けやき